MISSION

被災した押し葉標本を救え！

学術標本の修復「標本レスキュー」への取り組み

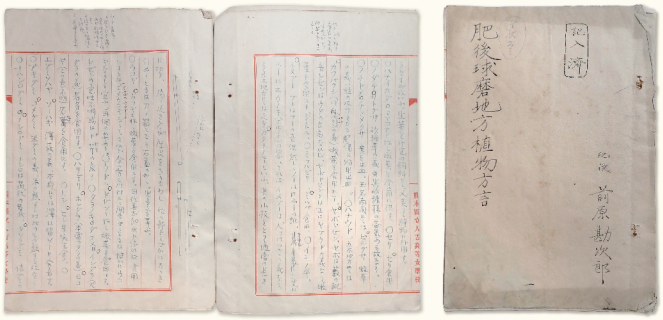
令和2（2020）年7月九州豪雨に伴う球磨川の氾濫によって、人吉城歴史館（熊本県人吉市）が浸水被害を受けました。ここには、牧野富太郎博士と交流があった植物研究家・前原勘次郎氏が採集した押し葉標本約3万点が収蔵されており、そのほとんどが水に浸かりました。すぐに泥を洗い流して乾燥しなければ、腐敗やカビの発生で標本が損なわれるおそれがあることから、全国の博物館、大学など約40機関が連携協力、高知県立牧野植物園も参加して標本レスキューに取り組み、水没した標本の修復を行いました。

被災した人吉城歴史館の標本収蔵庫（熊本県博物館ネットワークセンター提供）

前原勘次郎

まえばら かんじろう
（1890〜1975）

人吉高等女学校の教員を務める傍ら、長年にわたって熊本県の植物を中心に植物調査を行い『南肥植物誌』を著した植物研究家。牧野博士が日本各地の植物方言を収集した際、前原氏が牧野博士へ「肥後球磨地方植物方言録」を送付、牧野博士が植物研究雑誌にこれをまとめ「前原勘次郎君ヨリ寄セラレタ植物方言録中カラ」（1926年）を発表している。



前原氏「肥後球磨地方植物方言録」

標本レスキューの作業工程

❶状態の確認と保管

標本レスキューの呼びかけに応え、牧野植物園標本室では、7月20日に段ボール箱4箱を受け入れ。到着した標本の状況を確認し、カビの発生や腐敗を防ぐためマイナス30℃の冷凍庫で一時保管する。

❷レスキュー開始

8月24日から標本貼付室にて作業を開始。ラベルの情報がなくならないように、洗浄処理を行う前に標本を1枚ずつ撮影し、まずは記録を残す。上の写真は標本の状態を撮影したもの。かなり泥が付着し汚れている。

❸を洗い流し、カビを除去

泥のついた部分を、絵筆や刷毛を使って水に浸して洗い流したり霧吹きで噴射して泥を流し、カビが発生している箇所は70％エタノールで拭き取る。細心の注意を払って丁寧に作業を進める。

❹乾燥と仕上げ

大型乾燥機に入れて乾燥させた後、標本1枚ずつ状態を確認する。泥が残っているものは再洗浄へ、ラベルが剥がれそうなものは補強し、テープが取れているものは植物体を専用テープで台紙に貼付する。

❺修復完了

10月30日、標本レスキュー隊員によりすべての標本412枚の修復が完了。これら修復した標本は、地元での受け入れ体制が整い次第、返却する。

押し葉標本は地域の自然を記録する貴重な学術資料です。前原氏採集標本は、その時代にその植物がその場所に生育していた証拠となる、かけがえのない郷土の宝。被災地の一日も早い復興を祈るとともに、修復された標本が再び地域に戻り活用されることを願っています。